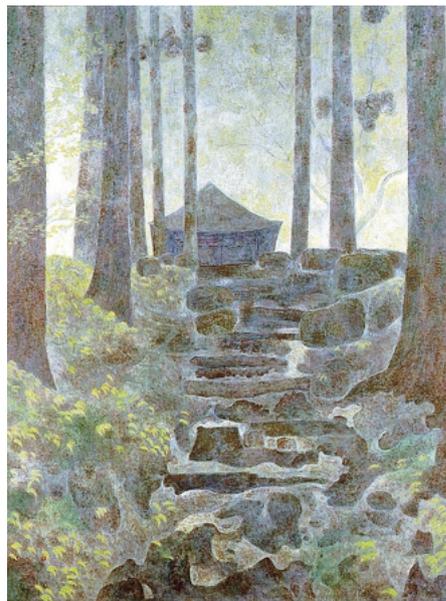


特別陳列 石川風土記 —故郷の美—



原智《鐵地象嵌花器》 日本工芸会総裁賞
—「第71回 日本伝統工芸展 金沢展」より—



石川義《経堂への道》
—特別陳列「石川風土記 —故郷の美—」より—

- 第71回 日本伝統工芸展 金沢展
- 雪舟と狩野派の絵画【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 狩野派の絵画【古美術】
- 秋の風景【近現代工芸】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 令和6年度土曜講座のお知らせ（後期分）
- 10月の行事予定
- 学芸室こぼれ話
- アラカルト ただいま展示中

各種団体展(第7・8・9展示室)

第71回 日本伝統工芸展 金沢展

主催/石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、公益財団法人 日本工芸会
後援/富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月25日(金)～11月4日(月・振休) 会期中無休(最終日は17時終了)

我が国には、世界に卓絶する工芸の伝統があります。

伝統は、生きて流れているもので、永遠に変わらない本質を持ちながら、一瞬もとどまることのないのが本来の姿であります。

伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することだけではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受けついで優れた技術を一層錬磨するとともに、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、我々に課せられた責務であると信じます。

昭和25年、文化財保護法が施行され、歴史上、若しくは芸術上特に価値の高い工芸技術を、国として保護育成することになりました。その趣旨にそって、昭和29年以来、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の7部門にわたり、日本伝統工芸展が開催されてきました。

金沢への巡回展は昭和38年の第10回展から始まり、以降は毎年開催されています。全入選作品539点の内から、重要無形文化財保持者(人間国宝)や受賞者らの秀作に加え、地元北陸(石川・富山・福井)の作家を中心とした入選作品を併せた286点を展示します。

本年は石川県から全国最多の68名が入選し、日本工芸会総裁賞《鐵地象嵌花器》原智(金工)、文部科学大臣賞《神代杉造箱》角間泰憲(木工)、奨励賞《蒔絵箱「盛夏」》田中義光(漆芸)の計3名が入賞しました。また今年度、重要無形文化財「沈金」保持者(人間国宝)の答申を受けた、西勝廣の新作《沈金箱「郷里」》も本展でご覧いただけます。名工のわざが織り成す、多様

◆展示作品解説

日時	11:00～	13:30～
10月26日(土)	《染織》毎田 仁嗣	《漆芸》田中 義光
10月27日(日)	《金工》般若 保	記念対談
10月28日(月)	《人形》高田 和司	《陶芸》吉田 幸央
10月29日(火)	《木竹工》福嶋 則夫	《染織》坂口 裕章
10月30日(水)	《陶芸》田島 正仁	《漆芸》林 暁
10月31日(木)	《染織》四ツ井 健	《陶芸》中田 博士
11月1日(金)	《金工》中川 衛	《木竹工》角間 泰憲
11月2日(土)	《金工》原 智	《漆芸》小森 邦衛
11月3日(日・祝)	《木竹工》中嶋 武仁	《総合》山崎 剛 (輪島漆芸美術館館長 金沢美術工芸大学 教授)
11月4日(月・振休)	《陶芸》中田 一於	《漆芸》山岸 一男

な美の共演をご堪能ください。(文中敬称略)

■観覧料
一般…900円(800円)
大学生…600円(500円)
65才以上…800円
高校生以下無料

※()内は20名以上の団体料金

■記念対談
日時…10月27日(日)13時30分～15時
演題…「工芸の現在と未来」
講師…山村慎哉氏(金沢美術工芸大学学長)
中川衛氏(重要無形文化財「彫金」保持者)

会場…石川県立美術館ホール(聴講無料・申込不要)



日本工芸会奨励賞《蒔絵箱「盛夏」》田中義光(石川)



文部科学大臣賞《神代杉造箱》角間泰憲(石川)

特別陳列 石川風土記 —故郷の美—

10月5日(土)~11月4日(月・振休) 会期中無休

学芸員の眼

本展では、日本画、油彩、彫刻に加えて工芸作品も展示しています。これらは、金沢美術工芸大学美術工芸研究所が1976年から1981年に行った「新しいデザインによる九谷上絵付の研究」によって制作されたものです。新しい上絵付のデザインを求め、陶芸家、洋画家、日本画家たちが協力して制作しました。

普段は洋画、日本画に取り組む作家たちが手掛けた絵付は、彼らの絵画作品とはまた異なる魅力があります。また彼らは様々な画題に加え、上絵付のデザインに石川の風景を選んでいきます。それは九谷焼ということはもちろんですが、魅力的な石川の風景が、作家の心に強く印象付けられているから、ともいえるのではないのでしょうか。



《色絵飾皿 能登海景》上絵付：平桜和正
焼成：金沢美術工芸大学美術工芸研究所
金沢美術工芸大学蔵

石川県には、広大な原生林を有する霊峰白山、断崖や岩礁からなる荒々しい日本海、白米の千枚田のよ
うな豊かな自然景勝があります。加えて古来より人
文物往来の地となり、また江戸時代加賀藩の文化奨
励によって発展した工芸や芸能など、厚い歴史や伝
統によって、人と文化が育まれてきました。加賀地方
から能登地方まで、多様な文化、風土が織りなす石川
の姿は、古くから多くの人々に愛され、現在まで伝
わっています。

本展は、3章構成によって、石川の姿を捉え、表現
した作家たちの作品から故郷・石川の美を探ります。
「序章 あゝ頃の石川」では、私たちがよく知ってい
る場所から今ではもう見ることができない場所、姿
まで「あゝ頃の姿」を見つめます。ここでは、石川県の
洋画の先駆けであった佐々木三六が描いた県内各地
の風景を中心にご覧いただきます。そして「1章 豊
かな自然と人の営み」では、石川の豊かな自然とそこ

に生きる人々の営みが紡いできた風土、作家の心を
捉えた多彩な姿をご覧ください。次に「2章 作
家を感じた石川」です。石川を題材に選んだ作家たち
は、そこにどのような美を見出したのでしょうか。自
身の琴線に触れたモチーフに向き合い制作された日
本画や油彩画、彫刻作品から、作家たちが感じた故郷
石川の姿とその表現を探ります。

石川ゆかりの作家たちが謳う故郷石川の原風景
が、いま一度、私たちの風土を見つめる機会となり、
その魅力を感じていただければ幸いです。



玉井敬泉《山(の)秋》

狩野派の絵画

10月5日(土)~11月4日(月・振休)会期中無休

江戸時代の画壇でもっとも大きな勢力を誇った狩野派、その源流は室町時代にさかのぼります。元祖である狩野正信(生没年不詳)は、足利將軍家の信頼を得て御用絵師としての地位を確立し、その子元信(1476~1559)の代には、各種の画題に対応した工房の基礎が築かれます。元信の孫にあたる永徳(1543~1590)は、豪放な表現で時の天下人に愛され、その子光信、孝信兄弟や高弟の山楽が激動の戦国時代を耐え抜きました。孝信の子で永徳の孫にあたる探幽(1602~1674)は、狩野派の画風を一変したといわれ、その瀟洒端麗しょうしゃたんれいと称される様式は江戸時代を通して狩野派の規範となりました。

本展示では、探幽とその周辺の絵師たちに焦点を当てます。展示は永徳の嫡男光信の弟子である興以(?~1636)の《西湖図》から始まります。興以は孝信没後の探幽三兄弟を教え導きました。そして探幽の作品を軸に、弟の尚信と安信、実子の探信と深雪、甥の常信、そして高弟の久隅守景の作品をご覧いただけます。守景は加賀藩で活躍したことも知られています。

探幽という偉大な存在のもと、おのおのが何を受け継ぎ、どのような個性を発揮したかを感じていただければと思います。



《西湖図》 狩野探幽

雪舟と狩野派の絵画

10月5日(土)~11月4日(月・振休) 会期中無休

重要文化財《四季花鳥図屏風》は、雪舟筆といわれる花鳥図屏風のなかでもっとも優品として知られています。この度の特集展示では、本作品を起点とし、江戸時代の漢画の流れを狩野派の作品を中心として紹介するものです。

雪舟(1420~1506?)は、中国絵画に学びながら独自の個性を発揮した絵師であり、その評価は現在に至るまで非常に高いものとなっています。それだけでなく雪舟は、後世へ多大な影響を与えたという点でも注目されます。

江戸時代までの日本の絵画を、やまと絵と漢画に分ける見方があります。おおざっぱに言ってしまうと、やまと絵は日本の風景や事物を描いた、例えば「源氏物語絵巻」のようなもの。漢画は中国の宋や元

時代の絵画にならって、中国的な主題を描いたものです。雪舟はもちろん漢画の系譜に連なる絵師ですが、同じ流れに近世最大の流派である狩野派があります。本展示では、上記の《四季花鳥図屏風》に加え《秋冬山水図屏風》伝周文(一隻)から日本における漢画の始まりを紹介し、そこから一足飛びに狩野探幽へ。探幽は、中世以来の狩野派が受け継いできた漢画のスタイルを一変させ、以後の狩野派の規範となる瀟洒端麗なスタイルしょうしゃたんれいを生み出した人物です。探幽とその子探信、探雪合作による《漢五傑図》や、狩野即誉《四季耕作図屏風》といった作品から、日本における漢画の展開をご覧ください。



重要文化財《四季花鳥図屏風》伝雪舟(右隻)

優品選

10月5日(土)～11月4日(月・振休)会期中無休

近現代の絵画・彫刻分野からは、秋を彩る優品を紹介いたします。

日本画部門から紹介する日影圭《汎^は》は、横8メートルを超えるモノトーンの大作です。「汎」とは、もとは英語の「pan」に漢字が当てられた言葉で、「限りなくひろくゆきわたること、そのすべて」という意味です。画題が表す通り、作者の世界観が表され、日本画には珍しい抽象的な大作です。

油彩画分野では金沢市出身の洋画家・富田裕夫が描いた《ローテンブルク》を展示します。ドイツ南部の街ローテンブルクの街を取り囲む中世の城壁から俯瞰し、赤いレンガ屋根の連なりに主眼をおいた作品です。空は写実を離れ黄土色で描かれており、このメルヘンチックな急勾配の赤い屋根と良く調和しています。特別陳列「石川風土記」でみられる石川の風

景と比較して味わってみてください。

また同じ展示室でリトグラフを展示します。リトグラフは、その技法が発明された18世紀末には版材として石が使われ、石版画とも呼ばれています。彫刻刀などを扱う技術が不要で、ペンやクレヨンなどデッサンするのと同じ方法で制作できるリトグラフは、多くの画家を引き付けました。脇田和はじめ、リトグラフに魅せられた作家の作品をお楽しみください。

彫刻分野では、清水良治《蜘蛛の糸(芥川龍之介より)》をご紹介します。しばしば文学を題材に制作した作者が、芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』に取材した作品です。上方を見上げ、長く伸びる蜘蛛の糸にすがる男。暗い影を落とすような男の姿は、まさに小説のワンシーンを思い起こさせます。



富田裕夫《ローテンブルク》

秋の風景

10月5日(土)～11月4日(月・振休)会期中無休

第5展示室では、「秋の風景」と題して秋にちなんだ、季節を感じる作品を特集展示します。

陶磁では吉田美統《釉裏金彩秋草譜飾鉢》。釉裏金彩の華やかな金箔の強い光の中でりんどうが愛らしく感じられるこの時期に触れたい作品です。このほかの展示作品の中に咲く、いろいろな材質で表現されたりんどうも是非探して楽しんでみてください。

漆芸では大場松魚《平文薄の棚》。薄の輪郭線はすべて金の平文で表現され、筆で描いたように平文線が自由自在に扱われています。全体からは強く硬い金の平文線が流れる薄の線の美しさを、細部にわたっては交差する部分などじっくりご覧いただきたい

です。穂先には粗い金平目粉を蒔いて、広がる穂を感じさせます。棚の側板には鈴虫が表され、扉を開くと秋の光景が一面に広がる仕掛けとなっています。

木工では二代伊藤伊齋《利休好茶箱》を。桐の白木造りの利休形の茶箱で、作品の底に二代伊藤伊齋とその弟子の隅田一雄の銘が併記されています。蓋表と側面にかけて描かれている桜と紅葉は、木村雨山の筆によるもので、目を引く華やかな作品となっています。

野外だけでなく展示室内にも秋真っ只中の風景が広がります。この機会に美術館で小さい秋を探しながらのんびり鑑賞を楽しんでいただけたらと思います。



大場松魚《平文薄の棚》

10月の企画展示室

第7展示室

2024年

二科会写真部石川支部公募展

10月10日(木)～10月14日(月・祝)会期中無休(17時30分閉室)

皆様方におかれましてはご健勝のことと拝察申し上げます。

二科会写真部石川支部展、一年に一度の開催の時期が近づいて参りました。

支部員、無鑑査、会友、会員、写真技術の向上や写真鑑賞をより身近に楽しんで頂きたく存じます。支部員45名、出品します。

今年、テーマ作品(能登)と題して、各2点設けて展示致します。元旦の能登半島地震からの復興応援を込め作品を展示しました。

支部員が参加し日頃の精進の成果を発表させて頂く事と致しました。二科会写真部石川支部の会員、会友、13名出品作品と入賞作品も同時展示となります。創造的写真表現で、二科会写真部全国最前線に並ぶ作品展示です。各自のカラーがより強く発揮されバラエティーに富んだ作品展になったと思っております。ご高覧のほどをお願いいたします。

◇入場無料

◇連絡先 二科会写真部石川支部 支部長 神谷義夫

電話：090-6817-0882

第7・8・9展示室

第77回

示現会金沢展

10月17日(木)～21日(月)会期中無休

一般社団法人示現会は、具象絵画を目指して昭和22年に石川虎二らにより創立しました。その後、大内田茂二、橘原健三の両名の芸術院会員を輩出しています。

今年の金沢展では、今春に国立新美術館で展示された作品と小品作品を併せて100点余りを展示します。

今年もできるだけ多くの方にご高覧頂きますよう案内させて頂きます。

◇入場無料

◇連絡先 一般社団法人示現会石川県支部長 松本 隆

電話：090-1317-4428

第8・9展示室

第46回

伝統加賀友禅工芸展

10月10日(木)～10月14日(月・祝)会期中無休

加賀友禅技術保存会は現在、友禅作家のうち正会員10名、参与会員3名が認定されており、加賀友禅の正統な技術保存と後継者育成のため、石川県の無形文化財の指定を受けています。その主旨を推進するため、毎年開催しているのがこの展覧会です。

第32回展より公募制を採用したことで、石川県内在住もしくは在勤者に限りませんが広く一般の方も出品できるようになりました。加賀友禅における新しい感性と創造的作品の数々をご覧いただけます。

※毎日午後1時30分より作品解説があります。

◇入場料 400円(300円)高校生以下無料

※()内は20名以上の団体料金

◇主催 加賀友禅技術保存会

◇連絡先 金沢市小將町8-8

加賀友禅会館内 伝統加賀友禅工芸展事務局
電話：076-224-5511

《若日の影》わかきひのかげ

高さ216.0 幅75.0 奥行59.0(cm)
昭和44年(1969) 第1回改組日展

矩幸成 かねこうせい

明治36年(1903)～昭和55年(1980)



腕を上げ、髪をなで上げる女性像。作者・矩幸成の少年の日の思い出がモチーフとなった作品です。自宅近くの浅野川べりで、水遊びや魚とりをする日々を送っていた作者は、そこではじめて見た、水浴びをする女性の姿に大きな感激を受けました。このときの鮮烈な印象を、いつの日か作品にしたいと考えていた作者の思いが《若日の影》というタイトルが示すように、本作に表れることとなりました。

矩幸成は東京美術学校に学び、裸婦の美を追求し、リアリズムに徹した、量感あふれる裸婦像に取り組みました。また金沢美術工芸専門学校(現・金沢美術工芸大学)にて彫刻指導を行うほか、日本彫塑家倶楽部北陸支部(現・北陸日彫会)を結成し、北陸の彫刻界をけん

引、後進の育成にも尽力しました。「彫刻は量の芸術である。彫刻の本質は量だ、だから私は量を追って表現する方法を取っている。」と語るように、本作も、肉づきのよい量感豊かな女性像によってモデルの美しさを強調しています。この作品によって作者は第一回改組日展の内閣総理大臣賞を受賞しました。

本作は10月5日(土)から11月4日(月・振休)に開催される、特別陳列「石川風土記 ―故郷の美―」にて展示いたします。ぜひご覧ください。

次回の展覧会

令和6年11月9日(土)
～12月8日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
加賀藩の美術工芸	石川県の寺宝
第3・6展示室	第4展示室
優品選 【近現代絵画】	彫刻家たちの研鑽 【彫刻】
	第5展示室
	優品選 【工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
10月7日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

10月は無休で開館しています

石川県立美術館だより
第492号(毎月発行)
2024年10月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

オホーツクの海で育った天然帆立の旨味を凝縮した最高級品!

ほたて千貝柱

北海道産 ほたて千貝柱 100g入・1袋

2,480円 (送料別) 2個以上ご購入で **送料無料**

お電話 050-1869-2550

寿物産株式会社

一口食べれば濃厚な旨味と香りがあふれ出す!

【広告】